

---

# NeoTokyoPunks Guild-XX

## Generative Story 《特別編 - Chapter1》

---

### 前提

番号法(平成25年公布)の成立により、平成28年にマイナンバー制度が導入され、国家により全国民はナンバリングされた。

当初マイナンバーは社会保障、税、災害対策分野に利用範囲が限定されていたが2030年代、国が成長分野と位置付けたWEB3利用促進を名目に法律を改正し、利用範囲を拡大した。そして、マイナンバーと紐づいた国発行のホットウォレットを全国民へ付与し、給付金の類はすべて国が認定したステーブルコイン(実質的なデジタル円)によりそのホットウォレットへ支給されることとなった。

労基法も改定され、給与支払いは、同ステーブルコインを利用し国発行のホットウォレットへ支払うことが、国から企業に対し強く推奨され、半ば強制的に国内の金融慣習が変更されることになる。国が管理するウォレットにマイナンバーを紐づけ、ブロックチェーン技術により、金の動きを効率的に可視化したことで、徴税等、国のガバナンスが結果的に強化された。

それから10年以上が経過した。日本国のweb3強化政策は一定の成功を収め、日本法人のスタートアップから多くの世界的web3カンパニーが誕生していた。A社もその一つである。

A社はメタバースを独自開発しており、the sandboxやDecentralandをはじめとした従来のメタバースを、操作の直感性などのUXや世界観で圧倒し、サーバ負担を技術面で一気に軽減、動作もスムーズである。ハードウォレット開発にも進出しており、マイクロチップ型の超小型版ハードウォレットを開発。ledgerなど他社を圧倒し、メタバースとハードウォレット業界で一気に世界を席卷し、マイクロチップ型のハードウォレットがあれば世界で一番メジャーなメタバース空間へアクセス可能となる。

経産省は、メタバースで世界を席卷しつつあった日本法人のA社に、カスタマイズした日本国民専用の公共用メタバース空間を委託開発させた。そこへのアクセスは日本国民向けに特別に開発者されたマイクロチップからアクセス可能となっていた。

国は、希望者全員の左手首にマイクロチップを接種する一大キャンペーンを実施する。そのハードウォレットは国が開発したメタバース空間へのアクセスキーの役割を担っていた。

マイクロチップを埋め込まなかった一部層を除き、義務教育はそのバーチャル空間へ全て移管、ハードの学校施設の多くは廃校、取り壊しとなった。役所や児童館などの公共サービスの多くもメタバース空間へ移管された。

当時、行政に悪意はなく、国家力を維持向上させたい一心だったらしい。専制主義の他国が早い意思決定と強力なガバナンスを背景に、急成長を続ける中、民主主義国家として、国力を向上させるための苦肉の策だったのである。

XXの多くは国、国民を思いそれらのスキーム構築をバックアップしていた若手キャリア官僚だった。彼らの努力もあり、マイナンバーの多目的利用やメタバース利用を通じて得た国民規模のビッグデータ解析、デジタルツインシミュレーションなどにより各種政策立案のクオリティも大幅に改善している。

==

後にXXになる若手キャリア官僚達はその日もメタバース上の霞が関二丁目交差点地下室に集い議論を戦わせていた。

その時一人の経産省課長が口をひらいた。立案途中のとある政策の強度検証をデジタルツインシミュレーションで行なっていた際、数字のバグのようなものを見つけたらしい。シミュレーション用の基礎数値の一部はブレインバースから提供されていた。その数字の一部がどうやらおかしい。

==

ブレインバースにアクセスするには、その名の通り、脳に直接接続する必要があり、一部の政界の長老や財界の巨頭、有名な科学者など、実績のある一部の指導者達が、閣議決定を経て選ばれ、生命維持装置をつけ心肺停止状態で脳だけを活性化させる装置でブレインバースに接続、活動することを許されていた。

元総理やノーベル賞受賞者などが名を連ねるブレインバース集団は参与という肩書ながら、現行内閣より発言力、影響力を有しており、ある意味完成された院政を敷いていた。閣議上申案件はすべてブレインバースの事前承認が必要となっており、ブレインバースのメンバーになるのも現行のブレインバースメンバーが認めない限り入れないため、近年のブレインバースの人選の偏りに世間では悪評がたっていた。

ブレインバースは、脳を活性化させ続けるため、また壮大な専用のメタバース空間を形成させるため、かなり巨大な装置がバックヤードに必要であり、稼働にかなり電力を要し、また多額の税金が注ぎ込まれる事業となっていた。本来死亡しているはずの長老達が国の意思決定に深く関与していること、また多額の税金が投入されていることから、ブレインバースプロジェクト自体も多くの国民から決して良いイメージを持たれていなかった。

ただ、そのプロジェクトをとめることは、脳が生きている多くの生命の生命維持装置を外すことと同義であり、将来ブレインバースとして生きながらえることを夢みる現内閣にはその廃止検討自体が話題にすらあがらないモラルハザードを生み出し、ブレインバースの院政体制は揺らぐことのない盤石な体制となっていた。

==

経産省課長の発言から若手官僚たちはブレインバースのとある壮大な計画を知ることになる。若手官僚94名が国家一種をやめ、霞が関を一斉に去ったのはそれから数週間後のことだった。

==

XXはその成り立ち上、永田町筋の情報網から適宜多層的に情報を獲得できる体制を維持しており、高いレベルのインテリジェンスを誇る。ただし、多くのロビイスト同様、彼らはその情報をギルド外に開示しない。他のギルドからも、それだけの情報網を維持していることはあまり知られていない。

DENNOWより緊急の知らせを受け取った時、XXは前々からシミュレーションを繰り返していたことを実行に移そうとしていた。ブレインバース侵入計画である

## Mission1 - ブレインバース侵入

ブレインバースも実はA社が開発を担っており、閣議決定を経て登録されたwalletアドレスからのみ、日本国民向けに開発されたマイクロチップ型ハードウォレットを利用し、アクセス可能となっている。

XXメンバーはキャリア官僚時代に、全国民向けの公共プラットフォームメタバースを導入した当事者であり、ブレインバース導入にも立ち会っていた。

ブレインバース導入時、呼び出しを受け、複数の長老への個別レクに官僚課長クラスも同席。多くの長老は当時、シークレットリカバリーフレーズの重要性を理解できておらず、レクの会議室でブレインバースキッドからシークレットリカバリーフレーズのシートを取り出して、目の前でひらひらと何度か物珍しげにその紙の両面を眺めるものもいた。XXIに加入することとなる若手官僚はその一瞬見えたフレーズを即時暗記していた。

XXIは、当時の記憶の元、複数のブレインバース要人walletのシークレットフレーズを把握している。

今回の計画では、ブレインバースアクセス許可リスト(walletアドレス)を管理する長老の一人のシークレットリカバリーフレーズを利用し、彼になりすましてブレインバースへ侵入、walletアドレスリスト改ざんを検討している

改ざん内容として、XXとJOKERSメンバーのリストを登録して、出入り自由にする予定である。

## Mission2 - ブレインバース侵入後の動き

XXの1名がブレインバース管理者のシークレットリカバリーフレーズを利用し、本人になりすましブレインバースへ侵入。XXIはJOKERSメンバーとして偽装し、544名分のwalletアドレスを許可リストへ登録することに成功。XXとJOKERSはブレインバース内へ侵入した。

侵入後、XXIは当初の彼らの目的のための活動をはじめた。

XXIにとって最も重要視する対象は、情報である。今回のDENNOWより届いた緊急のミッションと並行しつつ諜報活動に励んだ。彼らにとって、如何に正確な情報を網羅的に把握できるかが、重要であり、ブレインバース内でもその収集に徹した。

貪欲にブレインバースの様々な情報収集を行っていく。彼らにとっての最重要な興味領域はブレインバースのガバナンス構造である。

彼らには疑問があった。

日本に院政を敷いているブレインバースは果たして、日本人による統治機構なのか。他国の影響下にはないのか。

人間による統治下にあるのか。  
AIの管理下にはないのか。

**Mission3 - WantedTeller**の情報を集めよ。

none.